

名古屋工業大学 正員 荒井利一郎

中部電力

○加藤文夫

まえがき 本論文においては、薄肉シエルの1つの継手たる、図-1に示すような、パイプとコーン形パイプとの接合からできた構造において、コーンの上部端に偶力が作用した場合に関して、応力および変位の1つの解析方法について考察する。ここにパイプの半径 a とコーン形パイプの接合部における半径 r との比は $\frac{r}{a}$ 以下であるとする。このときには、接合曲線を平面曲線に近似できるからである。

計算方法 コーン形パイプの上部端には剛な、そして自由に剛体運動できるダイヤフラムがついてあるものとし、またパイプの両端はヒンジ支承であると仮定する。

円錐、および円筒に対する座標を図-1に示すように選ぶば、円錐面上の任意の点は次のベクトル式で表わされる。

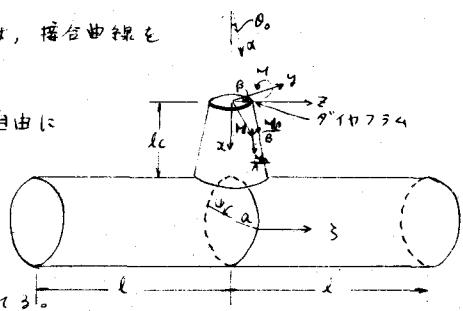


図-1

$$M = (x-a) \cos \theta_0 \dot{x} + a \sin \theta_0 \sin \theta_0 \dot{y} + a \sin \theta_0 \cos \theta_0 \dot{z}, \text{ここで } \theta_0 \text{ は開口の半分である。}$$

コーン形パイプに対する膜理論における基礎方程式は次のようになる。

つり合式:

$$\frac{\partial^2(BT_1)}{\partial x^2} + \frac{\partial^2(A\varphi)}{\partial x^2} - \frac{\partial B}{\partial x} T_2 = 0; \quad \frac{\partial^2(BS)}{\partial x^2} - \frac{\partial A}{\partial x} T_1 + \frac{\partial^2(AT_2)}{\partial x^2} + \frac{\partial^2(B\varphi)}{\partial x^2} = 0; \quad \frac{T_1}{R_1} + \frac{T_2}{R_2} = 0; \quad (1)$$

幾何学方程式:

$$\varepsilon_1 = \frac{1}{A} \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \frac{1}{AB} \frac{\partial^2 A}{\partial x^2} \varphi - \frac{\omega}{R_1}; \quad \varepsilon_2 = \frac{1}{B} \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \frac{1}{AB} \frac{\partial^2 B}{\partial x^2} \varphi - \frac{\omega}{R_2}; \quad \omega = \frac{A}{B} \frac{\partial^2(\frac{\varphi}{A})}{\partial x^2} + \frac{B}{A} \frac{\partial^2(\frac{\varphi}{B})}{\partial x^2}; \quad (2)$$

応力歪関係式:

$$\varepsilon_1 = \frac{1}{2Eh}(T_1 - \alpha T_2); \quad \varepsilon_2 = \frac{1}{2Eh}(T_2 - \alpha T_1); \quad \omega = \frac{1}{Eh} \eta(\beta); \quad \therefore \varepsilon_1^2 + \varepsilon_2^2 + \omega^2 = A = \sqrt{\left(\frac{\partial \varphi}{\partial x}\right)^2} = 1; \quad B = \sqrt{\left(\frac{\partial \varphi}{\partial x}\right)^2} = x \sin \theta_0. \quad (3)$$

これらの基礎式から応力、および変位は次のようになる。

$$T_1 = \frac{x_1^2}{2 \sin \theta_0} \left(\frac{1}{x_1} - \frac{1}{x_2} \right) \frac{d\varphi}{dx} + \frac{\alpha}{\alpha} \eta(\beta); \quad T_2 = 0; \quad \eta_1 = -\eta_2 = \frac{x_1^2}{x_1^2 - x_2^2} t(1); \quad (4)$$

ここで $t(1)$ 、および $\eta(\beta)$ は複合関数である。

$$2EHU_C = \frac{d\varphi}{dx} \frac{x_1^2}{\sin \theta_0} \left(\frac{1}{x_1} - \frac{1}{x_2} - \frac{1}{x_1} \log \frac{x_1}{x_2} \right) + \eta_1 x_1 \log \frac{x_1}{x_2} + 2EH\dot{\eta}(2) \\ 2EHV_C = (1+\alpha) \left(\frac{x_1^2 \alpha}{x_1^2 - x_2^2} \right) t(\beta) + \frac{x_1^2 \alpha}{\sin^2 \theta_0} \frac{d^2 t(1)}{dx^2} \left(\frac{1}{x_1} \log \frac{x_1}{x_2} - \frac{1}{x_1} + \frac{1}{x_1 x_2} - \frac{1}{2x_1^2} - \frac{1}{2x_2^2} + \frac{1}{x_1 x_2} \right) + \frac{x_1}{\sin \theta_0} \left(\log \frac{x_1}{x_2} + 1 - \frac{x_1}{x_2} \right) \frac{d\eta(\beta)}{dx} \\ + 2EH \frac{\alpha}{\sin \theta_0} \left(\frac{1}{x_1} - \frac{1}{x_2} \right) \frac{d\dot{\eta}(2)}{dx} + 2EH \frac{x_1}{x_2} \eta(\beta) \quad (5)$$

ここで $\dot{\eta}(2)$ 、 $\eta(\beta)$ は接合面における、コーン形パイプの垂直、および接線変位である。

また $\alpha = x_1$ の3脚面における変位は、この断面の中心における直動、および回転をそれぞれ $U_0 = U_x$ 、 $V_0 = U_y$ 、 $W_0 = U_z$ とすると、 $U_C \frac{M_0}{A} + V_C \frac{M_0}{B} - W_C \alpha = -T_0 \times M_1 + U_0$ となり、

$$|U_C|_{x=a} = (-b_1 x_1 \cos \theta_0 + u_0) \sin \theta_0 \cos \beta; \quad |V_C|_{x=a} = -u_0 \sin \beta \quad (6)$$

となる。 (5) 式 (6) 式から $t(\beta)$ 、および $\eta(\beta)$ を決定する。ここで未定係数 b_1 、および u_0 はダイヤグラムのつり合式、すなわち $\sum M_3 = 0$ 、 $\sum Z = 0$ の2式から算出され得る。

いっぽう、パイプに対する変位を、両端の境界条件を満し、かつ構造物、および荷重の状態

を考慮して次式で表示する。

$$U = \sum_{n=1}^{\infty} C_n \cos \frac{n\pi a}{l} \cos \psi; V = \sum_{n=1}^{\infty} B_n \sin \frac{n\pi a}{l} \sin \psi; W = \sum_{n=1}^{\infty} A_n \sin \frac{n\pi a}{l} \cos \psi; \quad (7)$$

ここにパイアの横断面形状の変形は、これを考慮していない。

いっぽうパイア内に貯えられた位置エネルギーは次式で計算され得る。

$$W = \frac{1}{2} \left\{ \left[\frac{E(1-\alpha)}{1-\alpha} \left((E+E_0)^2 - 2(E-E_0) \frac{1}{4} l^2 \right) \right] + \frac{E l^2}{12(1-\alpha)} \left[(E+E_0)^2 - 2(1-\alpha) E_0 l^2 - T^2 \right] \right\} AB d\alpha d\beta$$

またパイアの変形によって生ずる位置エネルギーの減少量は次式で表わされる。

$$\Delta = \frac{1}{2} \left[- \int_0^{T_0/2} V |T_{lb}|_{a=d_2} \cos \theta_0 d\theta_0 - \int_0^{T_0/2} U |T_{lb}|_{a=d_2} \sin \theta_0 \cos \theta_0 d\theta_0 + \int_0^{T_0/2} U \sin \beta |S_l|_{a=d_2} d\theta_0 \right]$$

ここに $|T_{lb}|_{a=d_2}$ および $|S_l|_{a=d_2}$ は接合線上においてパイアがコーン形パイアから受けた力であり、 V 、 U および S_l は接合線上におけるパイアの変位である。したがって変形後のパイアの位置エネルギー Π は $\Pi = W - \Delta$ であるが、位置エネルギー最小の原理を適用し、 $\frac{\partial \Pi}{\partial A_m} = 0$; $\frac{\partial \Pi}{\partial C_n} = 0$ より A_m 、および C_n を計算する。
 $A_m = \frac{\frac{\alpha^2}{a^2} \frac{M^2}{12\pi^2 C_m} \sin(\frac{n\pi a}{l}) \cos \theta_0}{-\frac{E\pi(1-\alpha)n^2}{2(1+\alpha)} \left(\frac{1}{2\pi^2 C_m l} + \frac{1}{(1-\alpha)l^2/a} \right) + \frac{E\pi n^2 \alpha^2}{2(1+\alpha)} l + \frac{E^2 n^4 \pi^4 a^4}{12(1-\alpha)^2 l^4}}$
 $C_n = \frac{n(1-\alpha)\pi}{\frac{2\pi^2 C_m^2}{l} + \frac{(1-\alpha)l}{a}} A_m \quad \text{となる}。$

計算例 1つの計算例を図-2に示す。 $a = 10.45 \text{ cm}$ $l = 120 \text{ cm}$ $t = 0.7 \text{ cm}$ $f_0 = 2.7 \text{ kN}$ $f_c = 10 \text{ cm}$ $\alpha = 0.8$
 $\alpha = 0.3$ $E = 2.1 \times 10^6 \text{ kN/cm}^2$ $M = 1 \text{ kN.cm}$ $n = 14$

あとがき、パイアの横断面形状の変形を考慮しない上記の計算方法はこの断面がダイヤフラムなどで補則されている場合に適用できることと信ぜられる。 [おわり]

図-2

